

# 快走

岡本かの子

青空文庫



中の間で道子は弟の準二の正月着物を縫い<sup>ぬ</sup>終つて、今度は兄の陸郎の分を縫いかけていた。

「それおやじのかい」

離れから廊下を歩いて来た陸郎は、通りすがりにちらと横目に見て訊<sup>き</sup>いた。

「兄さんのよ。これから兄さんも会社以外はなるべく和服で済ますのよ」

道子は顔も上げないで、忙がしそうに縫い進みながら言った。

「国策の線に添ってというのだね」

「だから、着物の縫い直しや新調にこの頃は一日中大変よ」

「はははははは、一人で忙がしがってら、だがね、断つて置くが、銀ぶらなぞに出かけるとき、俺は和服なんか着ないよ」

そう言つてさつさと廊下を歩いて行く兄の後姿を、道子は顔を上げてじつと見ていたが、ほーっと吐息をついて縫い物を畳の上に置いた。すると急に屈托して来て、大きな脊伸びをした。肩が凝<sup>こ</sup>つて、坐り続けた両腿がだるく張つた感じだった。道子は立上つて廊下を歩き出した。そのまま玄関で下駄を履<sup>は</sup>くと、冬晴れの午後の戸外へ出てみた。

陽は既に西に遠退<sup>とちの</sup>いて、西の空を薄桃色に燃え立たせ、眼の前のまばらに立つ住宅は影絵のように黝<sup>くろ</sup>ずんで見えていた。道子は光りを求めて進むように、住宅街を突っ切つて空の開けた多摩川

脇の草原に出た。一面に燃えた雑草の中に立って、思い切り手を振った。

冬の陽はみるみるうちに西に沈んで、桃色の西の端れに、藍色の山脈の峰を浮き上らせた。秩父の連山だ！ 道子はこういう夕景色をゆつくり眺めたのは今春女学校を卒業してから一度もなかったような気がした。あわただしい、始終追いつめられて、縮こまった生活ばかりして来たという感じが道子を不満にした。

ほーっと大きな吐息をまたついて、彼女は堤防の方に向って歩き出した。冷たい風が吹き始めた。彼女は勢い足に力を入れて草を踏みにじって進んだ。道子が堤防の上に立ったときは、輝いていた西の空は白く濁って、西の川上から川霧と一緒に夕靄が迫

ゆうもや

つて来た。東の空には満月に近い月が青白い光りを刻々に増して来て、幅三尺の堤防の上を真白な坦道のように目立たせた。道子は急に総毛立ったので、身体をぶるぶる震わせながら堤防の上を歩き出した。途中、振り返っていると住宅街の窓々には小さく電燈がともって、人の影も定かではなかった。ましてその向うの表通りはただ一列の明りの線となつて、川下の橋に連なっている。

誰も見る人がない……………よし……………思い切り手足を動かしてやろう……………道子は心の中で呟いた。膝を高く折り曲げて足踏みをしながら両腕を前後に大きく振った。それから下駄を脱いで駆け出してみた。女学校在学中ランニングの選手だった当時の意気込みが全身に湧き上つて来た。道子は着物の裾を端折<sup>はしよ</sup>つて堤

防の上を駆けた。髪はほどけて肩に振りかかった。ともすれば堤防の上から足を踏み外しはしないかと思うほどまっしぐらに駆けた。もとの下駄を脱いだところへ駆け戻つて来ると、さすがに身体全体に汗が流れ息が切れた。胸の中では心臓が激しく衝うち続けた。その心臓の鼓動と一緒に全身の筋肉がぴくぴくとふるえた。

——ほんとうに澆はつらつ刺と活きている感じがする。女学校にいた頃はこれほど感じなかったのに。毎日窮屈な仕事に圧えつけられて暮していると、こんな駄足ぐらいでもこうまで活きている感じが珍らしく感じられるものか。いつそ毎日やったら——

道子は髪を束たばねながら急ぎ足で家に帰つて来た。彼女はこの計画を家の者に話さなかった。両親はきつと差止めるように思われ

たし、兄弟は親し過ぎて<sup>から</sup>揶揄うぐらいのものであろうから。いやそれよりも彼女は月明の中に疾駆<sup>しゅく</sup>する興奮した気持ちをも自分独りで内密に味わいたかったから。

翌日道子はアンダーシャツにパンツを穿<sup>は</sup>き、その上に着物を着て隠し、汚れ足袋<sup>たび</sup>も新聞紙にくるんで家を出ようとした。

「どこへ行くんです、この忙がしいのに。それに夕飯時じやありませんか」

母親の声は鋭かった。道子は腰を折られて引返した。夕食を兄弟と一緒に済ました後でも、道子は昨晩の跣足の快感が忘れられなかった。外出する口実はないかと頻<sup>しき</sup>りに考えていた。

「ちよつと銭湯に行つて来ます」

道子の思いつきは至極当然のことのように家の者に聞き流された。道子は急いで石鹼と手拭と湯銭を持って表へ出た。彼女は着物の裾を蹴って一散に堤防へ駈けて行つた。冷たい風が耳に痛かつた。堤防の上で、さつと着物を脱ぐと手拭でうしろ鉢巻をした。凜々しい女流選手の姿だった。足袋を履くのももどかしげに足踏みの稽古から駈足のスタートにかかった。爪先立つて身をかがめると、冷たいコンクリートの上に手を触れた。オン・ユアー・マーク、ゲットセツ、道子は弾条仕掛のように飛び出した。昨日の如く青白い月光に照らし出された堤防の上を、遙かに下を多摩川が銀色に光って涼々<sup>そうそう</sup>と音を立てて流れている。

次第に脚の疲れを覚えて速力を緩めたとき、道子は月の光りの

ためか一種悲壮な気分に衝たれた——自分はいま澆刺と生きてはいるが、違った世界に生きているという感じがした。人類とは離れた、淋しいがしかも厳肅な世界に生きているという感じだった。

道子は着物を着て小走りに表通りのお湯屋へ来た。湯につかって汗を流すとき、初めてまたもとの人間界に立ち戻った気がした。道子は自分独特の生き方を発見した興奮にわくわくして肌を強くこすった。

家に帰って茶の間に行くと、母親が不審そうな顔をして

「お湯から何処へまわったの」と訊いた。道子は

「お湯にゆっくり入ってたの。肩の凝りをほぐすために」

傍で新聞を読んでいた兄の陸郎はこれを聞いて「おばあさんのようなことをいう」と言つて笑つた。道子は黙つて中の間へ去つた。

道子はその翌晩から出来るだけ素早くランニングを済まし、お湯屋に駆けつけて汗もぎつと流しただけで帰ることにした。だが母親は娘の長湯を気にしていた。ある晩、道子がお湯に出かけた直後

「陸郎さん、お前、直ぐ道子の後をつけてみて呉れない。それから出来たら待つてて帰るところもね」

と母親は頼んだ。陸郎は妹の後をつけるということが親し過ぎ

るだけに妙に照れくさかった。「こんな寒い晩にかい」彼は別な言葉で言い現しながら、母親のせき立てるのもかまわず、ゆつくりマントを着て帽子をかぶって出て行つた。陸郎はなかなか帰つて来なかつた。母親はじりじりして待っていた。そのうちに道子が帰つて来てしまった。

「また例の通り長湯ですね。そんなにていねいに洗うなら一日置きだつてもいいでしょう」

「でもお湯に行くと足がほてつて、よく眠れますもの」

と、かく兎も角、眠れることは事実だったので、道子は真剣になつて言

えた。母親は

「明日は日曜でお父様も家においでですから、昼間私と一緒に

きなさい」

と言った。道子は何て親というものはうるさいものだろうと弱  
つて

「なぜそう私の長湯が気になるの。眠る前に行く方がいいけれど、  
それじゃ明日は昼間行きましょう」

道子是一日ぐらいは我慢しようと諦めた。それが丁度翌日は  
雨降りになった。道子は降り続く雨を眺めて——この天気、天  
祐うっていうもんかしら……………少くとも私の悲観を慰めて呉れ  
たんだから……………そう思うと何だか可笑おかしくなつて独りくすく  
す笑った。

お昼過ぎに母親と傘をさして済した顔でお湯に行つた。

「そんなに長くお湯につかつてるんじゃないやありませんよ」

母親が呆あきれて叱なぐさめたけれど、道子は自分の長湯を信用させるために顔を真赤にしてまで堪えて、長くお湯につかっていた。

やがて洗ながし場ばに出て洗おけい桶おけを持って来るときは、お湯に逆上のぼせてふらふらしたが、額を冷水で冷したり、もじもじしているうちに癒なおった。

「いい加減に出ませんか」

母親は道子のそばへ寄って来て小声で急せぎ立てるので、やっと身体を拭ぬぐいて着物を着たが、家へ帰るとまた可笑しくなつて奥座敷へ行つて独りくすくす笑った。

「道子はこの頃変ですよ。毎晩お湯に行きたがつて、行つたが最

後一時間半もかかるんですからね。あんまり変ですから今日は私昼間連れて行ってみました」

母親は茶の間で日記を書き込んでいた道子の父親に相談しかけた。

「そしたら」

父親も不審そうな顔を上げて訊いた。

「随分長くいたつもりでしたが四十分しかかかりませんもの」

「そりやお湯のほかは何処かへ廻るんじゃないかい」

「ですからゆうべは陸郎に後をつけさせたんですよ。そしたらお湯に入ったというんですがねえ、その陸郎が当てになりませんのよ。様子を見に行つたついでに、友達の家へ寄つて十二時近くま

で遊んで来るのですから」

「ふーん」

父親はじつと考え込んでしまった。

雨のために響きの悪い玄関のベルがちりと鳴って止むと、受信箱の中に手紙が落された音がした。母親は早速立って行つて手紙を持って来たが

「道子宛ての手紙だけです。お友達からですがねえ、この頃の道子の様子では手紙まで気になります。これを一つ中を調べて見ましようか」

「そうだね、じょうず上手に開けられたらね」

父親も賛成の顔付きだった。母親は長火鉢にかかった鉄てつびん瓶の

湯気の上に封じ目をかざした。

「すっかり濡れてしまいましたけれど、どうやら開きました」

母親は四つに折った書簡箋をそつと抜き出して拡げた。

「声を出して読みなさい」

父親は表情を緊張さした。

勇ましいおたより、学生時代に帰った思いがしました。毎晩パンツ姿も凜々しく月光を浴びて多摩川の堤防の上を疾駆するあなたを考えただけでも胸が躍ります。一度出かけて見たいと思います。それに引きかえこの頃の私はどうでしょう。風邪ばかり引いて、とてもそんな元気が出ません……

「へえ、そりやほんとうかい」

父親はいつもの慎重な態度も忘れて、  
頓とんきよう 狂きやうな声を出してしまつた。

「まあ、あの娘が、何ていう乱暴なことをしてるんでしょう。呼び寄せて叱ってやりましょうか」

母親は手紙を持ったまま少し厳しい目付きで立上りかけた。

「まあ待ちなさい。あれとしてはこの寒い冬の晩に、人の目のないところでランニングをするなんて、よくよく屈托したからなんだろう。俺だって毎日遅くまで会社の年末整理に忙殺されてると、何か突飛なことがしたくなるからね。それより俺は、娘の友達が言ってるように、自分の娘が月光の中で走るところを見たくなくなつたよ……俺の分身がね、そんなところで走ってるのをね」

「まあ、あんたまで変に好奇心を持ってしまうて。でも万一のことでもあつたらどうします」

「そこだよ、場合によつたら弟の準二を連れて行かせたら」

「そりや準二が可哀そうですね」

「兎も角、明日月夜だったら道子の様子を見に行く」

「呆れた方ね、そいじや私も一緒に行きますわ」

「お前もか」

二人は真剣な顔をつき合せて言い合っていたが、急に可笑しくなつて、ははははははと笑い出してしまった。二人は明日の月夜が待たれた。

道子には友達からの手紙は手渡されなかったし、両親の相談なぞ知るよしもなかった。ただいつも晩飯前に帰らない父親が今日は早目に帰って来て自分等の食卓に加わったのが気になった。今晚お湯に行きたいなぞといえは母親と一緒に行くと言うかも知れぬ。弱った。今日は午前中に雨が上つて、月もやがて出るであろう。この好夜、一晩休んで肉体が待ち兼ねたようにうずいているのに。段々遅くなつて来ると道子はいらいらして来て遂々母親とうとうに言つた。

「お湯へやつて下さい。頭が痛いんですから」

母親は別に気にも止めない振りで答えた。

「いいとも、ゆっくり行つてらっしゃい」

道子はわれ知らず顔をほころばした。こんなことであるかしらん——道子は夢のような気がした。夢なら醒めないうちにと手早く身支度<sup>みじたく</sup>をし終つて表へ出た。寒風の中を一散に堤防目がけて走つた。——今夜は二日分、往復四回駆けてやる——

道子は堤防の上に駆け上つて着物を脱いだ。青白い月の光が彼女の白いアンダー・シャツを銀色に光らせ、腰から下は黒のパンツに切れて宙に浮んだ空想の胸像の如く見えた。彼女は先ず腕を自由に振り動かし、足を踏んで体ならしを済ました。それからスタートの準備もせずに、いきなり弾丸のように川上へ向つて疾走した。やがて遙かの向うでターンしてまた元のところへ駆け戻つて来た。そこで狭い堤防上でまたくるとターンすると再び川上

へ向つて駆けて行つた。

このとき後から追つかけて来た父親は草原の中に立つて遙かに堤防の上を白い塊が飛ぶのを望んだ。

「あれだ、あれだ」

父親は指さしながら後を振り返つて、ずっと後れて駆けて来る妻をもどかしがった。妻は、はあはあ言いながら

「あなたたつたら、まるで青年のように走るんですもの、追いつけやしませんわ」

妻のこの言葉に夫は得意になり

「それにしてもお前の遅いことつたら」

妻は息をついで

「それでも一生懸命だもんで、家からここまで一度も休まずに駈けて来たんですからね」

「俺達は案外まだ若いんだね」

「おほほほほほほほほほほ」

「あはははははははははは」

二人は月光の下を寒風を切つて走つたことが近来にない喜びだつた。二人は娘のことも忘れて、声を立てて笑い合つた。



# 青空文庫情報

底本：「岡本かの子全集」ちくま文庫、筑摩書房

1993（平成5）年8月24日第1刷発行

底本の親本：「老妓抄」中央公論社

1939（昭和14）年3月18日発行

初出：「令女界」

1938（昭和13）年12月号

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2010年2月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 快走

岡本かの子

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>